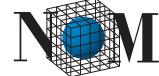


# 雪椿通信

新潟県立近代美術館だより  
Winter 2018-2019



vol.51



新潟県立近代美術館、  
現在改修工事に伴う長期休館中です。  
2019年秋、再開館予定!

改修工事のため、2018年7月2日より約1年間の長期休館に入りました。

この間、講堂等の貸出しも停止しています。

なお、再開館の日付については、決まり次第お知らせします。

大変ご不便をおかけいたしますが、ご理解いただきますようよろしくお願ひいたします。



# 改修工事、 なにが 変わるもの？

や収蔵庫にある作品が最適な温湿度の環境で展示され、また、保管、保存されていくための心臓部と言えます。

開館以来既に二十五年経ち、機器の不具合も多くなり、大切な作品にカビが生えたり、木質に割れが入ったり、金属が錆びたりしないように、また、ガスによる劣化を進行させないように、美術館では空調管理に特に気を使います。もちろん収蔵している作品が、今の私たちだけが良い状態で鑑賞出来ればよいというものではなく、大仰に聞こえるかも知れませんが、未来永劫に残っていくように最適環境で保持し続けなければなりません。



空調機

ちなみに当館で最も古い作品は五百年前、1500年前後のデューラーの版画で、日本で言うと戦国時代のまだ上杉謙信が生まれる以前です。このような作品がこれからまた五百年、それ以上に残っていくように努めなければならないのです。

また皆さん的作品を鑑賞する中でも展示中の作品が良い環境で展示されていることが望まれます。そのため企画展示室の壁付きガラス展示ケースが三面ある内の最長面のケースがエアタイト式になります。他二面はこれまでど

# 改修工事中、 なにを しているの？

でなければできない仕事が山積みなのです。学芸課ではこの1年間の休館期間に向けて、それぞれの業務を箇条書きにしたものをスケジューリングして、準備を進めてきました。夏休み前の子どものように、この機会にあれもしたい、これもしたいと考えていましたが、いざスケジュールを組み立てると1年間はあまりに短く、泣く泣く外した業務もあります。でも、この限られた時間の間、担当それが着実に業務を進めています。現在までのところ、開館中は、なかなか充分に行えなかった作品の状態確認を行ったり(これも収蔵庫に入れるまでの間が勝負なので、時間に追いまくられました)、普及チームは美術館を飛びだして、県立万代島美術館のレオ・レオニ展のワークショップや、各教育機関への宣伝活動、そしてたくさんの出前講座を行っています。この後も亀倉雄策関連資料の整理や作品分類の再確認など重要な業務が目白押しです。開館まで後がありません。ゴールで皆様をお待ちしています。

(学芸課長 藤田裕彦)

## 作品調査

当館の教育普及の舞台で大活躍するのが、加茂市出身の画家・橋本龍美の《風之唄》です。子ども達のみならず、学生も大人も、少しだけアプローチすると、誰もがこの絵にかぶりつきで釘付けになる不可思議かつ魅力的な作品です。

龍美が亡くなつて、早や2年。彼の回顧展を行うべく、アトリエを中心に作品調査を行っています。

加茂市に生まれた龍美は、33歳で東京都調布市に転居。その後まもなく画風が変化し、賞をとるようになります。描いたのは故郷・加茂での子どもの頃の体験をもとにしたものでした。

まだ、夜が現代のように明るくなかった時代、闇に、そして目には見えないこの世ならぬものに畏怖を感じていた頃、幼い心に焼き



橋本龍美《風之唄》1981年 紙本彩色 当館蔵

おり自然環流式です(予算が足りなく全面できません)。外気との交換をシャットアウトして内部の温湿度を保ち、汚損物質からの影響を断つことで、展示しながらも影響を極力下げるようになります。

外部からの影響を断つということでは、展示室内だけではなく、そこに至るまでの所にも改修を図ります。企画展示室前ロビーの



企画展示室



アルブレヒト・デューラー 『黙示録』第10団 聖ミカエル、龍を倒す  
1498年 当館蔵

ガラスサッシが一枚ものだったので、夏暑く、冬寒い長岡の気候の影響を低減させるため、ペアガラスに改修し、断熱化することで、企画展示室全体の温度の安定化を高める工事もあります。

このように何を修理したのか再開館しても目に止まらないかも知れませんが、皆さん、再び美術館で快適な状態で作品鑑賞できるように工事を安全に進めています。(専門学芸員 松矢国恵)

## そのほか、こんなところを改修します!

展示室の照明を、  
LED化します。

先日、万代島美術館を含めた学芸員全員が集まり、新しい照明の光を確認しました。



付いた原風景です。夜の闇の中でお地蔵さまは狐と化し、魑魅魍魎たちは騒ぎ出す。そして、年に一度巡ってきたサーカス小屋の蛇娘の恐怖…。想像力豊かな誠吉少年\*は、大人になって画家になり、それを描き出すようになったのでした。

皆さん、そんな橋本龍美の展覧会が開かれる日を楽しみにしてくださいね。

(学芸課長代理 宮下東子)

\*「誠吉」は龍美の本名

## 収蔵庫整理



長期の休館期間を活用して、過飽和に近い収蔵庫の整理することになりました。作品の位置を変えるだけでは埒があかないでの、この機会に思い切って作品が入っていた紙製の箱を処分することにしました。その結果、約200点の作品を可動式ラックに新たに掛けることが可能となり、保管状況を飛躍的に改善できました。しかし、箱を捨てるのは容易ではありませんでした。学芸員の習性として、物を捨てることができません。数十年間作品を入れていた箱には、何かが宿っている気がして、簡単には捨てられませんでした。前所有者が箱に書き込んだタイトルや制作年などの文字も気になりました。味わいのある字が何かを主張しています。作家が手作りしたような箱も混じっていました。あれも気になります。いよいよ捨てる時も、箱の中に万が一何か残っていないか気になって、すべての箱を再確認し、さらに再々確認し、漸く処分できました。何日間かは、文字の書かれた箱の影が目の前にちらついて困りました。「捨てる神 挿う神あり 片付かぬ」インターネットで見かけた川柳に、深く共感する自分がいます。

(学芸課長代理 平石昌子)

## 出前講座



改修工事中期間中、我々学芸員は、学校などに出向いて行う「出前講座」に力を入れています。先日は、小学校5・6年生を対象に、「学芸員の仕事」について話してもらいたいという市内の小学校にお邪魔してきました。児童たちは、学芸員という仕事があることを知るのもはじめて。たくさんの写真を交えながら、なかなか目に見えにくい学芸員の仕事を紹介しました。講座の後半では、我々の仕事の基本である「作品をじっくり見る」体験をすべく、鑑賞の時間をとりました。絵の中に「なにがいる・あるかな?」と問いかけると、児童たちは、思わず見逃してしまいそうな細かいモチーフまで次々と指摘!学芸員並みの觀察力を見せてくれました。授業終了後、「学芸員にちょっと興味を持った」という感想が聞こえました。こういった声を直接聞けるのは、出前講座の醍醐味。今後も人と美術館のかけはしとなるべく、「出前」していきます。

(主任学芸員 伊澤朋美)



## 館長所感

館長 木村 哲郎

開館から25周年を迎えた新潟県立近代美術館は7月から休館に入りました。雨風に打たれて建物のあちこちが傷んできたため改修工事を行うのですが、詳しい工事の内容については当館スタッフの報告を読んでいただきたいと思います。誕生から四半世紀、記念すべき年に長い間お休みし、素晴らしい所蔵品やこころ躍る企画展をご覧いただけないのを心苦しく思っております。

美術館から企画展、コレクション展の看板がなくなると、多くの方は美術館の活動がすべて止まった、と思われるかもしれません。美術館イコール展覧会、誰もがこうしたイメージをお持ちだからです。もちろん展覧会は美術館にとって大切な使命であり、館の存在を全国にアピールする晴れ舞台でもあります。

ところで美術館では日ごろから、4つの大切な仕事を行っています。①集める②守る③調べる④広めるーの4本柱です。「集める」は優れた美術作品の収集です。当館では宮田亮平文化庁長官が委員長を務める収集委員会があり、毎年厳しい審査を通った美術品を収集しています。「守る」は収集した作品を次の世代に引き継ぐ重要な仕事です。「調べる」は美術品の調査・研究。当館では1年から3年後に開く展覧会の作家や展示作品の選択・調査なども行っています。「広める」は展覧会です。来場された方が鑑賞して分かりやすい展示内容、鑑賞し終わっ

て満足してもらえる展示方法など日々研究しています。また、「広める」は巡回ミュージアムや学校を訪問して美術・芸術の素晴らしさを児童、生徒の皆さんにお話する教育普及などが含まれます。

毎年秋から年明けに

かけて、新潟大学の美術史の講座に講師を派遣。講師には新潟県立近代美術館、新潟県立万代島美術館、教育行政課の専門知識かな学芸員たちが務め、交代して教壇に立っています。このように展覧会はお休みしていますが、他の大切な仕事はきちんと進めているのだ

という事をご理解いただきたいと思っています。

休館に入って館の活動が見えにくくなつたのを少しでも解消しようと、ホームページに「学芸日誌」という新企画をスタートさせました。大学の教壇にも立つ学芸員たちが取り組んでいる研究・調査の話や、肩の凝らないエッセイなどを綴るコーナーです。美術館の活動の一端を見ていたいだけるのでは、と思っています。ぜひ県立近代美術館のホームページを開いてみてください。

(館長 木村哲郎)



平成29年度新収蔵品 横山操《野の川》 1972年頃

## ホームページにて、「学芸日誌」はじめました!

月1回学芸員が交代で、休館中の美術館の様子などを伝えています。  
毎月下旬ごろ、更新予定。トップページのトピック欄からご覧いただけます!

## わたしとこの1点 オーギュスト・ロダン《疲れ》

昨年コレクション展の中で、ロダン没後100年としてロダンに注目したコーナーが設けられました。そこで、憧れのロダン作品をじっくり見ることで、改めてロダンの魅力に触れることができました。中でも心惹かれるのは《疲れ》という横たわる女性像です。この像は《地獄の門》の左扉に位置する男女の像から少し形を変えて女性だけの像として大理石でつくられたもので、けっして大きくはありませんがロダン彫刻の技術と思想がつまつた魅力的な作品です。

本作は、顔の見える方が正面となっていますが、《地獄の門》では許されぬ恋の末に地獄を漂い流れる女性の後ろ姿として表現されています。今回、《地獄の門》以前にボーデレールの詩集『悪の華』にロダンが挿絵としてこのポーズを描いていたことを知りました。そちらも後ろ



オーギュスト・ロダン《疲れ》  
1887年 当館蔵

姿でしたので、このことから考えると、やはりこのポーズは悲哀をおびた女性の悲しみや苦悩そして絶望といった感情を表現するため“背中”を見せたい作品なのではないかと感じます。

じっくりと鑑賞していると、大理石のきめ細かな質感により肉体の奥にある骨格や筋肉から生じるわずかな起伏が繊細に表現され、はかない「生命」が宿っているようにも感じます。そして、作品に残る多くの石ノミの痕からロダンの手業や息づかいまで感じることができます。この小さな作品にロダンがどんなことを考え、どんな内面を表そうと思ったのか、100年の時間を超えて思いを馳せてみたいと思います。

(学芸課長代理 村山裕之)

## 編集部からのひとこと

当館は、改修工事のため長期休館に入りました。とはいっても、職員は休むことなく、いつも以上に忙しく動き回っています。今号では、そんな休館中の美術

館の一端をご紹介しました。再開館までにやらなければならないことは、まだまだ山ほど残っています。作品との再会を楽しみに、もうしばらくお待ちください。

(美術学芸員 松本奈穂子)

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第51号

編集・発行

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART  
**新潟県立近代美術館**

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14  
TEL0258-28-4111(代) FAX0258-28-4115

<https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/> e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷

株式会社 山田写真製版所

〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14

発行日 2018年12月21日